

●二人で味わう古典和歌(90)

おしてるや 難波のをえ小江に 廬いほ作り 隠なまりて居をる 葦蟹あしがにを大君おほきみ召すと 何せむに  
我を召すらめや……

作者未詳

『万葉集』卷十六、「乞食者ほかひひとが詠ふ歌二首」と詞書きの付いた長歌二首のうちの二首。「乞食者」は、家々を廻つて、寿歌ほきうたなど民間芸能を唱つて祝い、施しを受けていた芸人。「難波入江に庵を作つて隠れ住んでいる蟹かにである私を、大君が招集されるという。なぜこんな私をお召しになるのか……」と、蟹である「我」の心境がよからぬ予感をもつて詠い出される長歌はこのように続く。

明けく 我が知ることを 歌人うたひとと 我を召すらめや 笛吹きと 我を召すらめや 琴弾きと 我を召すらめや かもかくも 命いのち受けむと……(後略)。

「そんなはずないと私にははつきりわかっていることだけれど、ひよっとして歌人にと、あるいは笛吹きにと、もしくは琴弾きにと、お召しになるものか。たぶんそのどれでもないけれど、しかしまあお召しは受けようと……」。



嫌な予感ますます高まる。しかし、大君の命を断れるはずがない。

歌を聞く誰もが想像する通り、このあと蟹に訪れる運命は残酷無情である。「馬にこそ ふもだし(脚綱) 懸かくの牛にこそ 鼻綱はなづなはくれ」と、蟹は紐で縛られ「難波の小江の 初垂はつた(塩水)を からく垂れ来て(中略) 我が目らに 塩塗しほぬりりたまひ」と、むごいことに故郷の地の塩を目らまで塗り込まれて、乾物にされて食われてしまう。「腊たひはやすも(舌鼓なざるよ) 腊たひはやすも」の繰り返して締めくくられる哀しさ、異様さが印象深い。

こんな祝歌があるだろうか。本来別の意図があったのではないか。末尾の一文「右の歌一首は、蟹のために痛みを述べて作る」を素直に解釈するなら、祝歌をもじった風刺歌の可能性もある。長歌二首のもう片方は、「鹿のために痛みを述べて作る」歌。人間の都合で命を奪われる動物への深い同情を詠み、芸人によって家々に唱い伝えられ、歌語りになったのであれば、すこし救われる思いがする。万葉集で稀有な存在感を放つ二首。(小島なお)